

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

〈日本語解説〉 「パナマの客家移民と文化発展」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009542

〈日本語解説〉「パナマの客家移民と文化発展」

本稿は、パナマの客家をめぐる、ルーツ、言語使用状況、エスニック・アイデンティティ、客家意識、客家文化意識などの項目についてのアンケート調査をおこなったものである。アンケート調査は2011年におこなわれ、105のサンプルの集計結果よりパナマの客家をめぐる全体像を描き出している。本稿の概要は次の通りである。

- 先行研究の検討により、ラテンアメリカ全体における華人の移住史を概観している。ラテンアメリカへの華人の移住は、16～17世紀にフィリピンのマニラからスペイン船でメキシコに渡ったのがはじまりであり、後にメキシコシティではラテンアメリカ初の中華街が建設された。しかし、華人労働者がラテンアメリカへ大量に移住するようになったのは19世紀半ば以降のことであり、そのなかに客家も含まれていた。当時は中国広東省からマカオを経由してラテンアメリカに移住していた。また、1950年代後期からは、台湾からの移住も増えている。戦後の人口増加を解決するために政府はラテンアメリカへの移住を推奨し、1963年には「国際移民推薦方案」が採択された。1960年代以降、ブラジルを中心とし、アルゼンチン、パラグアイ、コスタリカなどに台湾人が移住した。ただし、パナマには台湾移民が少なく、300人ほどしかいないと見積もられている。
- 華人がパナマに初めて移住したのはいつかについては、2つの説がある。1つは1854年に705名の中国人がスワトウから出航したという説であり、もう一つは1852年におよそ300名の中国人がパナマに到着していたというものである。いずれにしても1850年代前半に移住した初期のパナマ華人は、1848年にコロンビア政府と企業が協力してつくったパナマ鉄道会社で労働をした。この時の労働者は、広州と香港で集められたという。続いてパナマ移民の第二の波が生じたのは1880年から1899年の間で、数多くの華人労働者がパナマ運河で労働した。その後、清朝政府は移住を禁止するが、1905年から1914年に再び移民の波が生じ、パナマ運河で労働した。この時、アメリカ合衆国の会社はキューバ、ジャマイカ、香港、フィリピンで華人労働者を募集した。こうした歴史的経緯もあり、パナマ華人の主要な居住地はパナマ運河の出入り口になっており、パナマ市とコロ市が最も多い。その他、特殊な産業が生じた都市、例えばバナナ業が発達したボカス・デル・トーロ、サトウキビと食塩業が発達したペノノメにも華人が居住する。客家は主に、雑貨店、デパート、レストランなどの商業に従事している。
- パナマの華僑は6,000人おり、そのうち3分の2が客家であると見積もられている。パナマで最も早く成立した会館であり、客家団体である人和会館は、1858年に成立した。会館では関帝を祀っている。人和会館の下位組織としては、花県同郷会、鶴山公所、中山青年聯誼会、恵東宝同郷会、遠清同郷会、赤溪同郷会などがある。本研究が2011

年に実施した統計ではアンケート対象者は、61.5%が花県と最も多く、その次が梅州の6.7%、赤溪の5.8%、他には中山、東莞、宝県、恵陽、鶴山などの出身者がいた。

- アンケート結果によると、何が客家の指標であるかについて、血縁（52.9%）と答えた者が最も多く、言語は39.2%、文化は26.2%であった。言語を客家であることの指標とする見解は半分にも満たないが、パナマは客家がマジョリティなだけあって相対的に客家語はよく使われており、半数以上の家庭で両親や兄弟と客家語を話していると回答している。ただし、家庭の外では、客家語を話す機会が減る。パナマで最もよく使われる客家語は花県客家語（32.5%）であり、その次が四県（梅州市の北部・中部）の客家語（14.8%）であった。他方で、客家は他の華人集団より祖先崇拜を重視するかという問いに対し、46.2%が同意する、12.5%が同意しないと答えている。相対的に客家は祖先崇拜を重視するという観念がある結果となっているが、41.3%が無回答である点も見逃すべきではない。
- 客家は客家と結婚すべきであるかという問いについては、無回答がほぼ半分を占めている。客家の男性（女性）は客家の女性（男性）と結婚すべきという見解に賛同しているのは30%弱、反対しているのは20%強と、やや前者が多いがほとんど変わらない。両親が客家との結婚を要求するかという問いも無回答が半数以上であり、要求するであろうと回答した者は32.7%、要求しないであろうと回答した者が14.4%である。若干、親世代は子女が同じ客家と結婚することを望んでいると結果が出ているが、親世代と子女世代とで大きく数値が変わるわけではない。同じエスニック集団の人間をより信頼するののかという問いに対しても、半数以上は無回答であり、やや同じエスニック集団の人間の方が信頼できるという意見が多かったが、10%の偏差もない。

以上は、質的調査を採択している点で、量的調査を主とする他の論文とは異なるデータとなっている。しかし、ラテンアメリカの華人をめぐる先行研究を首尾よく整理したうえで、パナマの華人の移住史を位置づけ、さらにアンケートによりパナマの客家とそのエスニシティをめぐる数的データを示している点で、これまでにはない新しい成果となっている。パナマ客家研究の先駆的業績ともいえる論考であるといえよう。

（河合洋尚）